糧断！

一九九九年の朝

檜山良昭

爆断！

一九九九年の朝

檜山良昭

講談社

目次

＊ 糧断！ 一九九九年の朝

目　次

第Ⅰ部　飢餓パニック……6
第一章　『緑計画』準備令　6
第二章　迫りくる飢餓前線　31
第三章　ナゾの大量買い　49
第四章　巨大倉庫群を発見　66
第Ⅱ部　ニッポン崩壊……94
第五章　経済大国の終焉　94
第六章　アメリカの報復　117
第七章　ナチス経済体制への移行　142

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

装幀　*　市川　英夫

糧断！　一九九九年の朝

第Ⅰ部　飢餓パニック

第一章　『緑計画』準備令

不吉な予測

五月中旬だというのに、北日本はまるで三月のような肌寒い日が続いている。バイカル湖付近に高気圧が真冬なみに発達し、北日本をすっぽり覆い包んでいるのだ。

河原井崇（かわらいたかし）は、ちらっと腕時計に眼を走らせた。二時半である。正確にいえば、一九九九年五月二十一日午後二時三十分だ。東亜商事の小麦課長である三輪孝弘と会う約束があった。しかし、会議を中断して退席するわけにはいかない。彼はそっと周囲を見回した。長方形の細長いテーブルに知った顔が並んでいる。どの顔も真剣な表情を浮べている。

そこは東京・霞が関の農林水産省五階の小会議室だった。毎月定例となっている気象庁長期予報

官による今後三ヵ月間の世界の気象予報の説明会が開かれていた。

この日の説明は、特に聞き逃すわけにはいかなかった。今後三ヵ月間、世界の中緯度地帯では、これまでにない異常気象が到来するだろう、というのである。

三時少し前に、気象庁長期予報課長の説明が終った。だが、八人の出席者のうち、誰ひとり席を立つものはいなかった。誰もがこれから起こるかもしれないことを、頭のなかに想い描いていたのである。

「時間がない。きょうの結論を早く出そうじゃないか」

説明が終ると八人の出席者のなかでリーダー格である農林水産省経済局長である塩川健吾が、出席者たちの顔を見回しながら、まず口を開いた。しばらく沈黙が流れたあと、食糧庁輸入課長である河原井が、三島長期予報課長に向って尋ねた。

「先月の説明会では、異常気象が見られることは見られるが、極端にひどいものではないとおっしゃいましたね。それが一ヵ月間でいっそう悲劇的な見通しになったのは？」

「極うずが予想以上に大きく、中緯度地帯まで寒気流を流しこんでいるためです。先月の時点では、過去三十年間の統計にもとづき、五月には極うずはもっと小さくなるはずだと想定していたわけです」

「ＷＭＯ（世界気象機構）も気象庁長期予報課と同じ予想なのですか」

農林水産省企画課長である宮本治が質問した。

「WMOの発表はまだありませんが、近日中にあるでしょう。昨夜、われわれの長期予報のレポートをジュネーブのWMOに送り、分析を依頼しました。その結論も、数日中に届くはずです」

質問が矢つぎばやにとんだ。それらに対して、三島長期予報課長は、自信たっぷりに受け答をした。気象条件に農林水産物の収穫は左右される。それが問題になり始めた七〇年代後半から、農林水産省は気象情報の収集に力を入れるようになっている。

「三島さん、この長期予報を発表するときは、表現に注意してくれませんか。なるべく混乱を起こしたくありませんからね」

重苦しい表情の塩川が、三島に頼んだ。三島は肯いてみせた。それから塩川は、ほかの七人の出席者に向って言った。

「いちおう、この件は大臣に報告しておく。異常気象の規模と、農作物に対する影響がまだ確定できないいまの段階では、対策のとりようがないだろう。しかし、今年になってから、食糧事情は窮迫しつつあり、夏の天候しだいでは、食糧危機も考えられないことじゃない。最悪のばあいは、『緑計画』の発動も考えられる。そのつもりでいてほしい」

『緑計画』という言葉を聞いて出席者たちは緊張した表情を浮べた。その存在だけは知っていたが実行されるのは遠い将来のある日だろうと、漠然と考えていたのである。

「やあ、待たせてすまなかった。ちょっとだいじな会議があってね」

東亜商事の小麦課長である三輪は、応接室でぽつねんと待っていた。テーブルの上が煙草の吸殻でいっぱいである。河原井は一時間も三輪を待たせたことを謝まった。

「さて、三輪君、用件は何だい？」

三輪の向い側に座ると、河原井は尋ねた。

三輪と河原井は同じ大学の出身で、しかも同級生である。しかし、そのことがわかったのは三輪が東京本店の小麦課長になり、河原井と親しくつき合うようになった三年前からである。

それ以来、たがいに親近感を寄せ合い、月に一、二度は会っている。

「忙しいときに時間をとったりして申しわけない。じつはジュネーブ支店からのテレックスによると、ヴィクトール・ペルシンがジュネーブに現われたというのだ。君のところにその情報は入っていないかい」

「ペルシンがジュネーブに？　本当かね」

河原井は、長椅子の背にもたれていた上半身を起して尋ねかえした。その驚きがこのことを知らないでいるのを示している。

「いや、まだ確認はとれていないのだがね。ジュネーブ支店も伝聞した情報にすぎなく、本当かどうか確認させているところなんだ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

ヴィクトール・ペルシンはソ連穀物輸出入公団「エクスポートフレブ」の総裁である。彼がジュネーブに現われる理由はただひとつ、西側の大手穀物商社に大口の買いつけ注文をする場合だけである。

「もし、ペルシンが大口商談のためにジュネーブに現われたとしたら、たいへんなことになるぞ。世界の穀物相場はいま以上にはねあがることになる。確認がとれたら、知らせてくれないかね。私のほうでも、外務省のほうに連絡して調べてもらってみる」

食糧庁輸入課は米麦の輸出入計画の立案、許可、輸入業務、輸入米麦、輸入飼料の買入れを担当している。実際には、米は国内だけで生産過剰なほどであるから、麦類と飼料の輸入が主な仕事である。

麦類と飼料の大部分を輸入に頼っているので、いきおい世界の穀物需給に関心を持たざるをえない。

国際的な異常気象の予報にソ連の大量買いつけ――いやな情報が重なる日だった。

首相官邸臨時閣議の決断

その日から三日後、WMOから加盟国気象機関に対して、月例の長期気象予報レポートが送られてきた。それは、北緯四十度を境に、北側では冷夏、南側では干ばつが到来する恐れがあると警告

し、特に例年より五度近く気温が下がる冷夏予想地域として東ヨーロッパ、ウラル地方、北海道、アメリカ五大湖地方を挙げ、雨がまったく降らない干ばつ予想地域としてアフリカ中央部、東南アジア、黒海北側、アメリカ南西部、中国南部があげられていた。そのレポートの写しは、気象庁から直ちに農林水産省に送られてきた。

「河原井君。本省で会議がある。君も出席するようにとのことだ」

業務部長の沼沢が、河原井のもとにやってきて、そう伝えた。会議は本館三階で開かれ、農林水産大臣以下主要幹部が出席した。河原井は入口近くのテーブルから離れた席をとった。食糧庁需給課長の沢井と彼とは、出席者のなかでも末席だったためである。

統計情報部長が、WMOのレポートを片手にまず問題の概略を説明した。

「……五月時点の世界の穀物在庫量は一億四千五百万トン。この数字は世界の総消費量十二億六千八百万トンの一一・四パーセントにすぎず、世界の食糧安全保障水準である一八～一七パーセントを、大きく下回っている状態です。その原因は寒害による春季収穫のニュークロップ（新年度にとれる穀物のこと）の大幅な減収であり、すでにFAO（国際食糧農業機構）は〝警戒報〟を発しています。ここで夏季の異常気象による秋季収穫のニュークロップが大幅な減収になると、わが国ばかりでなく世界全体が食糧危機に襲われる心配があるわけです」

それから、統計情報部長はレポートのさわりの部分を朗読し、説明を補足した。それが終ると、

大臣が口を開いた。

「それで、今年の秋の収穫はどれくらいか、どの程度の食糧の不足があるのか、予測はつかないのかね」

統計情報部長は、自分が非難されたかのように、憤慨して大臣を見詰めた。

「残念ですが、いまの段階では、気象予測だけから、収穫量を割り出すことは不可能なのです。もちろん、不足量についても同じことが言えるでしょう」

「そうすると、凶作の可能性がある、ということしかわからんわけだね。すると、問題はその可能性を信じて対策をたてるべきかどうかということになる」

大臣は、ひとりひとりの顔を見回してそう言った。

「今回のばあいには、食糧安全保障水準をかなり下回っていることから見て、特に危険であると思われます。もし、異常気象の被害が軽く、あるいは食糧危機が到来しなくても、対策を用意しておくことにしたことはないと思いますが……」

遠慮がちに事務次官である進藤利光が意見を述べた。何人かが、その意見に合槌をうってみせた。

「経済局長、きみの考えは！」

尋ねられて、塩川は筆記用具をテーブルの上に置き、答えた。

「同じ意見です。気象学者の報告では、一九四〇年代以来、地球は寒冷化の過程にあり、異常気象は、紀元二〇〇〇年に入ってようやく落ち着くだろうということです。六〇年代から九〇年代までは、もっとも不順な時期であり、今年がそうでなくても、来年に食糧危機が到来するかもしれない。自給率の向上などの対策は、とっておいても悪くはないと思います」

大臣は肯き、尋ねた。

「いまの意見に疑問がある者はいるかね」

誰もいなかった。それを同意のしるしと受け取った大臣は、話題を変えた。

「さて、次の問題は食糧危機対策として『緑計画』を発動すべきかどうかということだが、それについての意見は」

しばらく、沈黙が続いたあと、意を決したように事務次官が口を開いた。

「私個人の考えでは、最悪のばあいを想定し、『緑計画』準備令を出しておいたほうがよいと思います。なぜなら……」

進藤が理由をいう前に大臣は手を挙げて、事務次官を制した。

「もし、そうなると、豊作だったときにはとり返しがつかなくなるだろう」

「しかし、その逆の場合、凶作のときには、『緑計画』を準備しておかないと手遅れになりますが」

「わかった。私の一存では決められないからね。至急、首相に臨時閣議の招集をお願いし、閣議にはかることにしよう。それで、凶作のばあい、危機が到来するのはいつの時期だろうか」

その質問に対しては、統計情報部長が説明に立った。

「食糧危機は主要輸出国が同時に輸出を停止するならともかく、戦争や自然災害とは異った性格のものです。最初それは、国際相場の上昇という形をとり、輸入価格が急騰するはずです。この段階で、購買力のある国はずっとのちまで、ない国は真っ先に絶対量の不足という状況に置かれます。そして、最後の段階で、購買力の劣る低所得者層から栄養失調や餓死に襲われることになるでしょう。わが国の場合には、自給率は低いかわりに購買力があるので、食糧危機に対してはかなりの耐性があるでしょう」

それから二時間後、首相官邸で臨時閣議が開かれた。農林水産相が省内の統一した意見を説明し、『緑計画』準備令の極秘布告を求めた。

「閣員の意見は？」

首相は閣僚ひとりひとりの意見を尋ねた。

「私は反対ですね」

先ず外相である阿部俊三が口を開いた。

「世界的な食糧危機が到来したばあい、その解決は国際的な方法ではかられるべきです。新しい国

際間の食糧分配秩序を作ることが先決です。『緑計画』は食糧危機を日本単独で乗りきろうとする非常手段であって、問題の真の解決にはなりません」

その言葉に通産大臣である冨田博之も大きく肯いてみせた。

「この異常気象予報がどの程度的中するのかどうか、それはどの程度農作物生産に被害を与えるのか、それがわからないうちは軽々しい態度はとれませんが、もし最悪の場合でも、わが国は先ず国際的に協調し、その枠内で問題の解決にあたるべきでしょう」

「もちろん、そうです。私も国際的な解決を否定するつもりはありません」

川村農相は語気を強めて言った。それから、阿部外相と冨田通産相を交互に見ながら、

「しかし、これまでにも何度か、新しい国際的な食糧分配秩序を作ろうとして、国際会議が開かれ、結局は徒労に終ったことはご存知でしょう。おそらく、これからだって、なかなかそういう会議はまとまらないと思います。その間に、食糧危機が進行していったらどうするんですか」

首相である田沼節夫も川村の意見に同意を示した。

「いいじゃないかね。『緑計画』の準備を進めながら、世界食糧会議の開催を呼びかける。世界食糧会議で国際的な解決案が見つかれば、『緑計画』を中止してもいい。そうでなければ、『緑計画』を実行するしかあるまい」

七十六歳という田沼はくぼんだ小さな眼で閣員のひとりひとりの顔を眺めて提案した。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co